

課題 盗む

「色」

佐藤翼 (16) 中学生

如月亮介 (16) 中学生

川谷一郎 (36) 美術教師

○草原

青々とした草原に寝転がっている、佐藤翼(16)。服装は中学校の制服姿で、手には緑色の油絵具が握られている。佐藤の表情はよくみえない。

○中学校 美術室

夕日の差し込む美術室。

佐藤と如月亮介(16)が、黙々と油絵を描いている。

佐藤は、石膏のブロンズ像を描いている。如月の絵は画面一面が、鮮やかな緑色で何を書いているのかは、よくわからない。如月、集中して絵を描き続けている。

その表情をちらつとみる佐藤。学校のチャイムが鳴る。

川谷一郎(36)が、美術室の隣にある、美術準備室から、ふらつとでてくる。

川谷「そろそろ、終わりにしてー」
佐藤、筆をとめる。

川谷、佐藤の絵をみながら

川谷「よく、かけてるねえ、佐藤君は」

佐藤、無言で片付けを始める。

その間も、如月は絵を描き続けている。

川谷「如月君、おわりだよ」

如月、川谷の声が聞こえない様子。

川谷「如月君」

佐藤は黙って教室からでていく。

川谷「（それに気が付いて）ちよっと！」

如月はまだ、夕日を背に絵を描き続けている。
いる。

○ 帰り道（夕方）

学生服の姿の佐藤。

川沿いの土手で独り、座っている。

土手には青々とした雑草が風にたなび
いている。

佐藤、それをずっと見つめている。

佐藤「…あの色じゃない」

雑草は、さつきと同じように風に揺れ

ている。

×××

少しずつ暮れかかっていく、空。

佐藤の姿は闇に溶け込んでいく。

○佐藤の部屋 (夜)

本棚には、美術関係の本が並んでいる。
部屋の真ん中にはキャンバスがあり、草
原の中で馬が走っている書きかけの絵
がある。

佐藤は、ベッドの上で寝転び、携帯ゲー
ムをしている。

○同 (朝)

ベッドの中で、咳をしている、佐藤。
風邪をひいたらしく、だるそうにしてい
る。

○学校 教室

授業中の風景。

佐藤の席は、空いている。

如月は、一番前の席にすわっているが、授業の内容がよくわからない様子で、ノートに落書きをしている。

教師に気づかれぬようにして、周りの生徒が消しゴムを投げている。

如月は、それには反応せずに、ずっと落書きをしている。

○美術室

如月が、キャンバスにむかって絵を描いている。

その後ろに立っているのは、川谷。
如月の絵は、抽象的で何を描いているかわからない。

川谷「何を描こうとしているの？」

如月「……楽しいって思ったこと」

川谷「楽しかったこと？この前の修学旅行とか？」

如月「あれは、楽しくない」

川谷「そう、楽しくなかったんだ」

如月、頷く。

川谷「じゃあ、なんだろうなあ。楽しい事って」

如月「絵をかく」

川谷「絵？今、描いてるでしょ。これが楽しいの？」

如月「佐藤君と一緒に描くの」

川谷「一緒に？」

如月、頷き、佐藤のキャンバスを指さす。

川谷「もしかして、隣で佐藤君がいて絵を描くのが好きなの？」

如月、こくりと頷く。

川谷「そっかあ：それ、佐藤君に伝わってないだろうなあ」

如月、不思議そうな顔をする。

川谷「今度、佐藤君と会ったら、楽しいですっていうといいよ」

如月、笑って頷く。

○佐藤の部屋

ベッドの中で、佐藤は咳をしながら寝ている。

窓の外は晴天である。

○佐藤の夢（草原と小屋）

真つ暗な闇の中、自分の背の高さほどもある草をかき分けて、逃げている佐藤。

小さな小屋がみえてくる。

○佐藤の夢（小屋）

小屋の中は真つ暗だが、暖炉があり、そこだけ明るい。暖炉に近づくと、そこには川谷が座っている。

川谷「やっときたの？」

佐藤「…」

川谷「寒いでしょ。ここに座って」

佐藤、川谷に勧められて暖炉の横の椅子に座らされる。

川谷「もう大丈夫だから」

川谷、佐藤に重いコートを着させようとする。

佐藤「…いいです。寒くないんで」

川谷「何言ってるの。寒いでしょ。ほら、如月君も寒いって」

川谷の目線の先、暗い部屋の隅には、裸の如月が濡れたまま、小さく震えている。

佐藤「なんで、こんな恰好で…」

川谷「なんでって、それは佐藤君が望んでいるから」

川谷、冷ややかな目で佐藤をみている。その目に恐怖する、佐藤。

○佐藤の部屋

目が覚める佐藤。

汗でびっしりである。

起き上がり、自分の部屋をみる。

描きかけの草原の中にある馬の絵をみる。

立ち上がり、その絵の上に別の絵具を塗りたいくる。

○美術室

佐藤、ひとり立って、如月の絵を眺めている。

ふと見ると、緑色の絵具が床におちている。それを拾う、佐藤。

ドアが開き、如月が入ってくる。

如月、佐藤をみて、満面の笑顔。

佐藤は、とっさに絵の具を隠してしまう。

如月「：楽しい」

佐藤「楽しい？」

如月「佐藤君がいて、楽しい」

佐藤「：これ、何かいてんの？」

如月、にこにこ笑っている。

佐藤「そんなんじや、わかんないよ」

如月「佐藤君」

佐藤「え？」

如月「佐藤君と僕」

佐藤 「これが？」

如月、うなずく。

佐藤 「：いらいらさせるな、お前って」

如月、戸惑いの顔。

佐藤 「わからないくせに」

如月 「：ごめんなさい」

佐藤 「謝るなよ」

如月 「：ごめんなさい」

佐藤 「だから、謝るなっ！」

佐藤の大声に、硬直する如月。

その声に気が付き、隣の部屋から、川谷がやってくる。

川谷 「：何？」

佐藤、無言で出ていこうとする。

川谷 「ちよっ、お前」

川谷、佐藤を引き留めようと肩に手をけるがそれが振り払われ、その手が如月の顔にあたり、如月は尻餅をつく。

川谷 「大丈夫：？」

如月の唇は、赤い血がにじんでいる。

川谷「(驚いて) 保健室! いかなきゃ」

川谷、如月を立たせようとするが、それを如月は拒否する。

如月「(佐藤に) ごめんなさい。僕がバカで」

佐藤「…」

如月「ごめんなさい、ごめんなさい。謝るから、絵をわかるようになるから」

佐藤「ごめんって言うな…」

如月「わからなくて、ごめんなさい。だから友達でいてください。ごめんなさい…」

佐藤「だから…!」

佐藤、如月から逃げるように部屋をでていく。

○草原

佐藤、草原に寝転がっている。

手には緑色の油絵具が握り潰されている。

泣いているようにもみえる、佐藤の表情。

風が草原の草をゆらしている。了